

秋化粧

小野澤繁雄

刈入の済みしばかりに田のあいをただ走る人長く見ている
人の住む少なき町に歩み入る向うから先に挨拶がくる

晴れて風決まりのような訓練日煙体験に笑顔がそろう

ふくらむを止められざりしコキア畑かたちのままに末枯れておりぬ

みちのはば隔ててここにすれ違うかすかながらに少女はうたう

ひとつところに三十年を住むところ終らんとする日々の一日か

モミジにも種類はあれどことごとく言葉によりて秋化粧まで

小走りに犬に合わせてゆく人の影の大小も関係にして

満どうだん天星の枯れ具合でもそのあとの秋の紅葉が決まると人は

花は小葉は大なるを好むよう青桐がもみじし始めている